道標（みちしるべ）第1070号

平成29年 4月13日
校長　稲垣　達也

（考え、議論する）特別の教科 道徳 を語る前に･･･

「道徳性を形成する筋道」について

― 道徳性を深めるには、道徳的価値の自覚を深めることによって可能になる ―

1　道徳性を形成する道筋

道　徳　教　育

自分自身に固有な行動や判断の基準となる道徳性を育てる

道徳的価値の自覚

価値の自覚とは、**児童の心が価値を受け入れ、心に結びつくこと**

道　徳　性

人間らしいよさであり、**道徳的諸価値が一人一人の内面において統合さたもの**

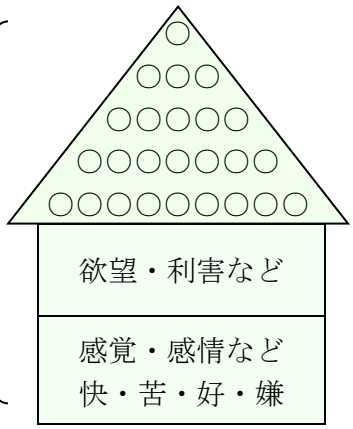
道徳性を形成する道筋

一人一人が価値体系を形成していく。人それぞれ独自のものとなる

心　の　顔　一人一人固有の心が築かれる

2　道徳性の構造について

道徳性



人間の**価値意識 ＝ 価値体系**　を形成する
　○は、一つ一つの価値
　　（美しい、正しい、善い、誇り、友情など）
※ 大きさや並び方は、個人によって違う

人間の**自然性**
　人間は元来、自己中心的なところが多い
　人間の本能に従属している面が多い

道徳性の構造を、生得的な欲や生のままの感情、感覚などと、後天的に育てられる価値意識との両方からなるととらえる。価値の意識は、自覚された価値の集合体であって、その全体像は一人一人異なる。これを鏡餅のイメージでとらえると分かりやすい。上段が価値意識である。上段を、下段の発達に遅れないように発達させるよう、道徳的価値の自覚を深め、その集積によって道徳性を育てる。道徳的価値の自覚を深める際に、常に下段を元にして自覚を深める。

3　道徳の授業のポイント

(1) 行いとは区別して、ねらいとする道徳的価値を考えさせる。
　① 人間の自然性についての理解を深める。
　② 道徳的価値に気付かせる。
　③ 価値のもたらす喜びの面に着目させる。
　④ 生き方、ないしは人間としての誇りの問題として考えさせる。
(2) 常に資料と生徒自身を重ね合わせながら考えさせる。

道標（みちしるべ）第1071号　平成29年4月14日
校長　稲垣　達也

（考え、議論する）特別の教科 道徳 を語る前に･･･

「道徳の時間」　基礎の基礎

道徳の授業に児童の興味・関心を持たせる指導のポイント

1　発問の大原則は、活用する資料を手掛かりに子どもの経験に結び付けて考えさせる発問がよい。
（手掛かり：資料を学ぶのではなく、資料から学ぶこと）

2　一回の授業では、内容項目の一つを取上げ、そこに示されている道徳的価値について、「思い込みの知」から「本当の知」への気づき（発見、変化）を体験する学習の時間とする。

3　教師の用意した発問で、児童たちは「考える」から「分かる」というプロセスを体験する。そのためには授業の中で教師と児童、児童相互の対話が欠かせない。そのときの対話を通して、児童達は互いの意見を吟味し合い、自分を見つめる力を養っている。
（対話：自分を見つめることになる → 自己肯定感につながる）

4　発問は、行いと区別して、その行いをさせている心のはたらきに着目させて考えさせる。
（道徳的実践力：価値が自らの行動となって表れる時の心の働きの意）

5　教師は、進んで学習活動の中に参加し、一緒に考えたり、話し合いに加わり、時には児童の発言に共感し合ったりしながら授業を進める。

6　発問の構成上、配慮する事柄
(1) 発問の前半部分では、人間の生まれながらにもっている本性が描かれているところに着目させて、児童自身をそこに重ねて考えさせる。
(2) 中心発問に至るまでの発問は、ねらいとする価値について「思い込みの知」から「自分にとって本当の知」に達する重要なところである。
　学習する児童にとっては、この時間が自分にとってとても有意義なときとなるか否かの分岐点となる大事な場面である。
(3) 中心発問は、ねらいとする価値にかかわる事柄について、児童達が新たな気づき・発見とか心の中に大きな変化をもつ瞬間である。一種の興奮状態になる。

道徳授業をつくる基本となる事項

1　子どもの実態把握の着眼点
(1) 生活・行動面だけでなく、気持ち・心・願いをとらえる。
(2) “ねらい’とする“道徳的価値”と関わる子どもの願いをとらえる着眼点をはっきりさせる。

2　「ねらい」と「指導」の着眼点
(1) 内容項目の中から一つを選ぶ。　(2) 行いと区別して道徳的価値を心に受け止めさせる。
(3) 実践化の意識を持たない。　(4) 子どもの意識の表層と心の奥底に働くものを理解する。

5　授業後の「子どもの観察」と「授業者の自己評価」の着眼点
「価値について、より深く考えるようになったか」、「ふだんの生活の中で価値を一層自覚できるようになったか」など、子どもの内面を教師がより正しく感じ取ることが、教師自身の授業改善や指導の向上のためには大切なことである。